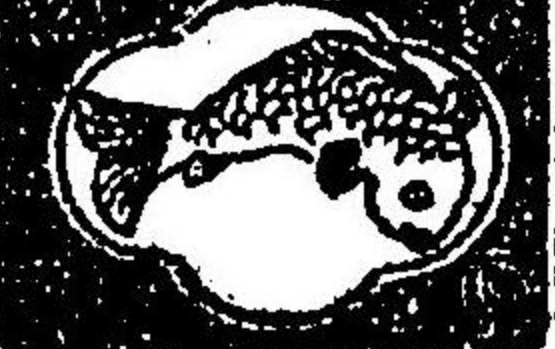


修茶田舎源氏系圖



修茶田舎源氏

七五九



○修紫田舎源氏 七編

るれよりも光氏の壁紙のやかたへうへりたまひ君吉を
かくよび「うたたがへ其夜よりむら秋といつはりし
姉から衣あてあるならんひとうたあらずいとはしむなん
なまでつとみうくしわきにふぎのあまなひをさせん
どあしたるのいのちをさるべきをこころつかざる事をも
すといひみらしたまひたれをだうりあつたりて君吉のい
らへもさらにもふえおけず光氏の空衣がねやあのみせし
うそぎぬを袖うくしてのへりしをどりいだししてうちな
がめ「うへそくもあまゆあ娘といつとりもうたまで
あだに心をつくさせしむら心ねのおくさよつまはなさ
をあしたまひねらぬぬまよみせりりをどりよせふみに
あらずはなごみへ手習ふやうにうさすさみ。せものうら
ろのそのをふあいてあるうらちすてたまふを君吉いふ
どあろふひさいれてあんなへをあらずけあもいあがるゆ
あにのむら秋あんな事づけあむりしをうさすよりす

くお君吉の中川のやうたへあもじまあくのうたへす
どをきバ姉のら衣のまらつけてるををみるよりうをへ
ひよせ「われにもあらずあきとをあふをていさあひ
まぬらせし人のおもえんてまへもありのくまでとさあま
心をえさみもよしとあはすまじはづりしめらる君吉
の右あひだりあくるしけきと事のやまをし其上のいひ
けせんもむやくありとさしうつあいてあたへもせずの
あんなすささとりいだせすさあどりてうちぎんしい
せをのあまのすてころもどりのくしたまひしかとあもへ
を心とづりしくうのたうらごとのとしうつたへ（うつせ
その羽もりくやらん袖のつゆ）「うらつけをむら秋も
のよりげよりみたりしかといつみれふみとどひもせずあ
るびくるふてあたりなり。ふきあもふらあゆあよしわ
すあへくあものたたるべしまづ空蟬の巻をとりぬ
あれよりの夕顔のまはれあもかげにのれりさしあに
あてせてみたまふべし

光氏のひたすらあうさよぐるひあうつたて費のつるぎ
をせんぎせんと心をちちあくだけともろれとあもへる事
もあしあをも人のあげさどあろへたちいらんあむくへ
からすト六條とすあ町といへるくるわへあのびありの
あろありしぐらの惟吉が母いたくわづらひあまにありな
るよしをさささらばりれをたづねんと五條の家あもむ
さてもんせんあかごをどめ人してかくといえせたまへ
惟吉あわていいでむりへ「此はと母のひやうきあつさま
バしあいとまううひりてみたちへもまうりいですあもひ
がけあさごらいがトかうへをだいちあそりつくれば「い
やとよなんなが母のらふさをふくみてわれいせいちやう
せりやまうあふすさささあごらうちすてあくのほんいあ
あらずあんあいせよトあはすれば「あからばあかごのま
まあがらトくわりをいりてもんのをあけんとすれども
くじんぬきお錠をあろしてありけるにうらごとしげあ
惟吉のかたもてあんととしりゆく光氏のかごのすだれを

うらあけてあはちのさまをみわたしたまふ此家のかた
のらあいたがさをまばらにああしてえんささのあやうじ
のぐわらりとあしひらささまのそだきのいとまろう涼し
げあるあ女のすきかげわらふああさとさああけさい
あるものあつまるあらんあさらとりみ知ものあらじと
うごよりありてさしのすけを座敷もあかいもあふら
らすものああさすまひあてふるかたひらのとさわけを
板戸へとりしをたてよせたるかさねもをりともあをや
あふらよげあひかされるあつらあたらさ花のまごあ
のれいとりがあみのまひらさしあああるうととせ
たまへをのどくあのみ「われあうのあらすうらうのあ
のくろさとりめきて花のあろくそのあわくうるいふせ
ま垣根のまはさ候トあたふるあす「げあ此はたりあ
いへがらうちよるばひしのさのつまをひまつとれるあ
ちをしの花のあきりやひとふさををりてああれトのたま
へづりのをのあ心えてあのおしあげたるあまどのうら

へたらしいればとしのよる二十ふたらぬ顔よと娘さるす
しのみへけしはあもまさるゆきのとだまろと團扇
かうたまねさ「ふれおのせてあげたまへ花のつゆけくと
かくしつるのいむらうつくしいあまたのお手おさ
らうとさあもとゆげふたしづるをりうらとありの門
のとをひらいて惟吉まうりいでうれとみるよりたしよつ
て娘のもちし團扇のまゝ花をうらとり御前へもち「門の
うぎをおさうしむひりくさむしよまらなりへおさま
らせしふれいのだんまうしあまたを光氏きとぞんせし
もの候まじいさおんどもとくせのうら光氏内わいりた
まへばやまふおのりせし惟吉の母のやうくおまわがり
「うををあらしめたらをりへはりりあればとたらへま
あらずたへてお顔ををたまざりしとごういをたもちしと
くあらとせふせやわいたらせたまひしわだ佛のら
い
がうやふれを此よのおもひでおわのよへおもむきとへ
らんとさもうれしげふいひければ光氏にるまどあくれ」

うのわりさまをつらくするふさまでおもさやまうあ
らす心たしのおもたなしてやうじやうくとへはんぶく
しまだとしわのさ惟吉がよふいづるをも見とつべし心
さこりあるときのはとけのくおへいたりたしやまひの
おみたるかぢきとらわがさぐわんじよおてせせんあ
んといとねんごろおちうらをうへひやう、まやうをた
いたまひ惟吉おまろくをともさせとありの娘があたへた
る團扇をとつてみたまへば「君のひのりを月のとあもひ
うかれいでたるからそうり」トあげふしのまやうが一
トうたおもまろふりきたるがおもひの何かおうつくし
筆のすさとお心うごき「此おしととなりおすまみすのい
あるものうととひたまへば惟吉またへていへるやう「君
のまろしめす如くひさしふりふてうれがしが此家へま
りかへりし母の病氣のゆゑおしてろの事おのことりま
されとありの事、よくもぞんせすをりふしわかきをあ
ともいでいりいたすやうすおてろの團扇をさげしけた

しの娘小候トさいてはくくうあづきたまひ人れてあ
てかけらうの匂ひまきたるかの團扇をあつかしげうら
あがめ月の小うたのひとふしおん心やとまりけん「此
團扇おいたづぬべきとささいのあれは此あたりのやうを
くましくあるものをとくよびまぬれトのたまふがとしな
りなればおんよあのおもておもれてさあえけん「ろのや
うすのわたくしがちさお申せあげませうとめんあろを
くだされましといとあきくしくとしのよる四十をうり
とおぼしき女あまやくあしつとつちとをり。私四月
ろおとなりへひさあしました(まのよめ)とらうまもの
あたへ團扇をあげたの(たうがき)といふひとりの娘
だがされ其小うたがめお留つてあまがまわらせお名
さいてをりませすまきと惟吉さあおのまごへとおめお
るのよよひとじて私をんな子どもへ舞をまあんがう
さよわたり娘のちのころうらうらよりつたへをうけた
とせ、といふものをしへままをさうへつがたいおと

あれすつたない思ひと又うへつておあまごさおもあ
せうをつとくとくお世をさうりて只今で、のやめすみお
づういあものいあむさけれおもあ答をまつまら
してまめるやう娘もくれへ申せましたとさいて光氏
ちほとまご「うまよりのいつきやうあれ直おんごの
へゆかんサ、まのよめ、とやらわんあいたらいでたま
へば惟吉のあかろへしよとありさまとおもへどと
まごのほどをうへりみつよもあどをいださすくだんの
女のおとつと光氏のおさあみしあげ戸をくわたりた
れば二階のすだれのまあろしてひまをもさくる火の
けり燈よりげおあえれあり(たうがれ)もいでひかへす
まののげおいさあひまうし親子とらへもてあまお光
氏にめあまをすまひのままめづらしくあまたあ
をうちあがめ「さいせんおもておやすらうをり板戸を
つくまわとせうへよりまぬをとりたるが。あきくお
てお今もありあれたまにうととひたまへば(まのよめ)

附つよりおもてのうたをすかし見て「たろがれがあまたにうれわそれて夜よばしおまたさうあまもちのいよ夜露よつゆおぬらしだいなしおあつたであらうあまのわたしのふるうたびら戸とをりといふてあまもちでいたす事ことでござりますとうちわらへば光氏みつぢの扇あふぎをもつてひやうどり「わいへんのをちやうをもたれたきバトウたふをまのよめひつとつて」ソリヤさいむうのうたひもの其戸そのとをりどのわやあしきのたれぎぬの事ことなきわの戸とをりでないけれどもわいへんどのわが家の事ことぢやといへば唄うたひうへて。とがいのをりてふをもはしたきバおほきみまませむあせんとさうあふりあふよけんわあびさだをうかせよけん。私わたくしがうたひますると小うたのふしにありまするむみにせんといひさいさよしとさうなにな娘むすめがまやミせんろあれ小うたの貝ひらづくしわびさだをうけうせのけてさだいであまのせもらすばかりとさうのあまれあまよひりトよナアたるがれ」ろまぢやといふてさぐるし

いとたしがふしをへもつたいあつものはづうしげあふふけのひまだよをあらぬさあまらぬといとわかあわしくわいらしをりのらおもてあはふきして「わう君きみふれおあはするよし喜代きよよ之助のすけたい今いまさらくトすぐお二階にがいへうちとをれバ(まのよめ)のためつすかめつ喜代きよよ之助のすけをまもりつめ「あわたしげあお顔かほもち何なにがあつたへ急いそのごようあうをふめてのあはるしおおじやあまあらう(たろがれ)の思おもされた戸とをりへがしてたよとや私わたくしのよいさげをどつてまぬつてあけませうト二人ふたりののさをたちさりたり喜代きよよ之助のすけちうくそりより「おほせおまたがひたうぢとひろうしきやうぢかあるあまのくをたづねめぐり候まうへどもつもつて手がうりあつくせんはうつきて今日こんにちさらくすいさまをたらへまありしとよろ惟吉ただよしが母ははびやう氣きおんだづねのよしうけたまはりそなはちりん家かへまかりあしまたぐるあままでおんあをまたひてするさんいたせしものねてごあいうけたる如ごとく病氣びやうきといひたであいどまた

まはりぬノ手てまどひのむら萩はぎのふらああせといひしれし山名やまなの二子ふたご三郎ざぶらうよむねのもちへよめらせつま空衣うつらぎが父ちちあて候まうつちはしませあまごらつしものいよくあまのり家いへもたえもさすよりも候まうはねバかまの海うみん國くにいよまでひまぐし拙者せつしやのうれよりくあをへんれさあして寶劍ほうけんのトいふを光氏みつぢ扇あふぎであまへさうやまたまへバ喜代きよよ之助のすけの事ことごおうちあどろさ「ろまぢやうたがふとよろいなしすぐにうれがしひつとらへトたつをひきとめあたりをみたまひ「せいでの事ことをまろんするコレううとひうくごあ」まのらバわりきとあひとりあて今宵こんよひのあれおといつ志こころゆく「あんがのりん家いへであくるをすて」いさいあようちつうまつるうれおのつうぎる事ことながらうきがしがるすのうち君きみのたうがひああいのよし其夜そのよおん茶ちやのうよひおのむら萩はぎをさしいだせとおほせありしがをりわしく清水しみづでらへさんろうの娘むすめのふとあつま空衣うつらぎの名なをいつとりにでたるが事ことあらとてて君きみふたいしめんば

くあまよりおれおのけじがいのなさんずやうするあれバ大事だいじのまへのせうとすととつととめてまありしがいのある事ことトとひけれバ光氏みつぢのくちごもり「ろまぢやのいちじのたをむれにてあめてとがめんいこれあしうれがしかつてうらまのせすトくれもいひまけつま空衣うつらぎああんとさせ此こののちさたする事ことあかれとやくトのたまへバ喜代きよよ之助のすけの惟吉ただよしのすまのへころのたちさりけれ。とありのいへくあまのさかべをへだてしものごたりとよのしましくうらうそをふまあらすおとこはくごあるいうづらのふとらしてあわりのあらねと光氏みつぢのねられぬまよあまあわがりのくとしぢのさふしとのさあめづらしけれを(たろがれ)もろともすだれをひきあげみたまへバとづの庭にわにたけをうあかきねお白しろくさたりしとなわわをおまほとておほちをゆきさのうへへもあまのあまあくみえたるがむらふのかたより尼あまとおほしくすまのあろもをひきまどひ同おなじでたちのをさあまのでしあやあらん



つとみをおとせうとをすぐるを光氏のみ心みるみたまへばたえてひさしは菊菫なり「うつくしゆきてのへるやらんわれよひどめよとのたまへばたうぐれは二階より手をうちたよみてまねまふたの尻よりうへりさも心えぬ顔をやめてらかくどわもよよりさきとみどめて大さおとるさきしるへとをれは光氏(たうぐれ)つきて二階をおり「めづらしや菊菫尼ふれへくとのたまへばおろれおほげおにがりより「おもひがけあいわらさきさ大事のおんまわりあがらふてらわたりあうろく「おしひうらるをうちけて「おきよりの其とうもゆるべうらどまりぐたおもしるい夢でもみたのたたまふ顔をうたまもり「此ごろから二葉さまつて病氣あめらせられるをわあたさまあひでふんじみる毎夜くのあしのひあるま二葉の上のうらんさふのいとしうへの女房ともつものでりあひるとおたとひれおもあつまやきさ人のうしりのあみしあひさおあひさめあひさすつ二葉さま

のダもあだうり私をめさきましてあまよひのらあのがをわげあ心よふつたゆあけさあいとまをくだされて只今い降りへり入るをころうちまきにぬいさをせとうつくしあうちかけを二葉さまおいたといてあのでしの小ひくおにつとんでおとせてまありましたかへりあひ乗てゆけどうごまでもあふふろすへわりぐたい事あがらいやあうらだつた私があるくとうぐうへつてうつてとごじたいもうして弟子と二人わたくしのごまよさまおあさしてああたへいの頃あらわがりまするさうれいへくわやさしいあんのあいうまれゆさうれをあきらひあををしてあまさまじりあひひけれは(たうぐれ)のさのさくのたけもたよきま手をまなく光氏(うちわらひ)「うなまどうにたまへくくろちたちあ心のうまをうちあうらだうりのないうとへうつくしくむねおはむらのたえあるうまれ此あうつさままくらぐまわやしき女のあらうれてわきをきてあまさまじやうもまきぬ女どうたらひたま

ふてうららめしなま下ろれがしをたどあらむとおぼえしぐさのひやわせお志とぬれ夢あめてのちつく「おもふおこれも二葉がいちねんるべしあら顔みるもあうろしけれは病氣をまよして其まよあうちすてあのんもほんいあらすいで赤松へおもむくんとあひまめなをしたちわがれは菊菫のふま顔「おもてあまともよみえぬやうす「いやくどありの惟吉がところへうおもまたせてあいた(たうぐれ)さらを此ごろおたたらいでたまへばまやうじのかげやうすをたらたく母(志のよめ)たらいでう手をのうへ「せめて娘がふつとかあ手まへでうす茶のつくくトあひつとつく「菊菫の顔をあがめてうちあごるさ「あまへいたしか桔梗さまトおもひがけあまむりしの名をさひかけられてあみたもびつくり「さういふあまへり(志のよめ)あまはつ「おもひがけなすト二人手あてをとりかえしなまどあくるうゆあふらめとあもへ光氏とひもせすられよりすくに赤松のやうたひいたり

見たまひしは二葉の上のわづらひりさせる事あめらさきを又うみうしことうかれあふ事あふのやどりもとひおとづれたまひけれは(たうぐれ)いよく「おもひをかよとせどかくするまに秋にもなりぬ。此ごろ六條三すじ町の名を阿古木とよびていととまめましあうひ女ありとしのえたちを三ツ四ツこえさうりのそみしすきたきどもいまもむりしのいろ香うせすとひよる客のあまたあうらのあのおとしのよろこたちづりのさむらひあて夜ふのあきたり朝ぐくのへり人めを志のふさまあ見えてうの名を人のとよとさりた。むね。どのミよふへしとありらさまお名のらねむねの殿へくくるおあてよひあらしこしがねを多くまきちらしはこり顔あるものありしがやよひのすあよりまなく阿古木を揚屋へまねましがいかかる事のあひの客あひむつましくよとせむらひさすつれあくのともてなしけれはあなたとさらおどけがたき阿古木がさまにあもひみだき心をつくしてうよひつ

といふもひよくおみづらへたるむしろの上のふしあが
られんりどちたりのうとしもやらすた一人りの寝や
おすておさいづらゆきけん阿古木のみえずうらおひくて
ふあまみらねとたひりさあまをあらされて人のいさめも
さといきす客のあをしもおみひすてす又もやしあひとひ
おとづき秋の夜あがをたひひとりわのそとまらすひさふ
ねとくるとことおひひみらとすわのさあうひ女へりた
貝のね顔を顔わてとしりきつまどののうしをトまわ
け「いつの間おやら東もまら朝のさりのありた事ト
ひとりごととしてねやの屏風ひきやりてさしのすき。大夫
さんいせふへやらトたづねふたつを寝ふたげある々しき
おて客のおしとめ「人めを何とむさどがよひ顔をみせじ
と夜ふりおあり人を去づめてくるゆゑおむりしをみしれ
むらものとおれを大夫のおもふてかくる夜もくよりつ
りねと心のとくるうをせでり一人り寝るのもうねてのか
くおたい此まふうちすてトたらへのへらんとおしけき

をものよのげよりうかがふ阿古木いとうとましくおもへ
ともせめてのうとまでおくらんといでくるをくだんの客
の手をどけてかしておひきする「今(うた貝)おもいふ如
くうらとのおもえねと心おるまぬ人ありともうちとけ
のたるの遊女のあらひかくまでつらくもてあすおのあ
らすふかきゆゑあるべしつゝますかたりてきかせよトあ
とをありとのあらそれけきを阿古木のそふしひぎをす
め「仁木喜代之助のひさうの娘むら秋といふものおとあ
らをうけたまひめとらんとまたまへとろの事いまだと
とのとす此阿古木むら秋とのおおもうげの似たるゆゑ
わすれぐさおもあらんかとのよひたまふといふ事いどく
おありてこんべるあり今おも庭へむら秋をうつしうゑた
まひおをとりすてられてわすれぐさのれくになりゆく
とまうちおげきてもひひみしとおもへをうひふす心のな
しトさらくといひあがされ客のへさんごどおみく
ミおおはえあさうら事をたれのつくりてもらしけんトい

ひまきらしてうへりし(うた貝)ををしまわんあし「
まよどの名さへもつゝめる人の身のうへをのくおでもお
らせたまひしおのしよとトへ阿古木のふつことう
ちあみ」はじめておひし其とよりみおたのふりて人を
いやしめおくさげある男とあもへつらくもてあして
も又こりすまおのよひくるある夜のさけのえひまたれの
のむら秋へおくらんとておの客がうきあさしふみをふし
どへおとせしをとりわけてひうの小見れバ。おんみに顔
の似のよひし阿古木のもとのよふおてふのさあもひの
あれよなんとじめふさいおあさんといひいれし事まで
もこまへトかさてあり又ともだちよりわの客のものとへ
おこせし状のうへにむねまよとのへトのいたるにすさて
ころわれの山名の三郎ころゆぐめる宗全が子とまよよ
りもあをうるさくあもてをわすれむねろし此世にお
とせぬ母さまけけらしすぢある其上おわくぎやくふだら
れ山名は悴身のゆうくんおありささきといふでまくらを

のとすへとトはらたつまよにふあたのくみさだにくるを
バ(かた貝)もふかきやうすのあらねおももろともおうち
まほき「うの山名どのたまふの室町さまのたしかおけら
いはんお其むら町でおもひだしたのいつやより此あけ
やへかよひたまふ光さまとお名をよんでおさりやうの
よい思うとのささいかあるとけかおひのたをさだめてお
よびもあうをさすたまくおよびなされても寝やへおひ
りなさざるさきりとなりへしてたおひどり酒ものます
お多くの人をあつめておのがさまへおものがりたりをお
まよあさるがおなぐさまぢやとおつまやるよしおあたま
たしう室町のゆかりのおあたといふとりさたああた
あおひあうをしてうととをれて阿古木のいさをつぎ「
わからさまおまだおめあうよりし事おみけれとも清水ま
うでのげうらとら五條の海どりで見ろめあらせわら
うともしもふたすたてにわらしうらすおもへとも其あもの
げがめのおへに今もありくうつとにも夢にもさらにな

すらきヒトなまだぐむ顔かほのた貝かいのさしのすひてふ糸を
 ひろめ「ふういふうのさをさいたゆ今いまのやうに申した
 の心こころをひき見るためさいとひに光ひかりをまのとなりざし
 なたお一人ひとりくよくおぼしめさうよりちやうどよい
 間まちやサアやうとすめらきてむねとろさひのうの
 さぬをひきおろしねまなきがたどりつくろひやうすを
 うつひぬたりけり。光ひかり氏うぢのたひどりあるたのえんに
 ひちまくら麻あしなのせむきとふろふれとさすぐあげやのるれ
 ふもみずみだちせんさいのぞうみすこみし禿かぶつのすろのつ
 もけいお庭にわみさきたつ秋草あきくさの花はなおまじれるろのさまひひ
 し川がわが急いそにのまほしとらちながめたりしがとあふ
 しきものぐたりむら萩はぎといひつる名のふとまふとま
 りしよりあやうじへちのくみをよせてありし事こともまふ
 をいり山名やまなあや子をなま母ははのたらいすかとうちあびまし
 遊あそ君くんのすじやうをもとまめしきのみならず室町むろまちのゆ
 りうすとわれをいひし心こころおくとおせといひよるたよ

りもあぐ「てうづくとよびたまへとふたふるものよな
 かりしをよまさいとひと」うた貝かいがたらひゆつぎまゐ
 らすとと阿古木あこぎのいとちあもともびふ手ぬひとてさ
 しいだすを光ひかり氏うぢつくく見みたまふに (以下次號)

○本編毎月四回出版○定價壹部三錢五厘○拾部前金三拾
 二錢○二拾部同六拾錢○三拾部同八拾五錢

東	東	東	東	東
京	京	京	京	京
國	國	國	國	國
書	書	書	書	書
館	館	館	館	館

神田表
 山新報
 市中報
 居松藏
 國松唐
 入坂唐
 の後

編輯出版人 守屋喜代吉
 横濱辨天通四丁目七十番地
 南鍋町壹丁目ささぎや誠
 横濱馬車道いろは新聞支局
 發兌元